令和4年9月号No.173

也懶性圭と道者超元

原田博二（本会会長）

隠元禅師(以下、隠元と記述)は、承応3年(1654)7月5日、長崎に渡来した。その当初の目的は、崇福寺(鍛冶屋町)の3代住職に就任するためであった。

寛永6年(1629)開創された崇福寺は、福建省の福州府(福州市とその一帯)の人たちによって維持経営された唐寺で、初代住職(開山)超然(ちょうねん)も2代住職百拙如理(ひゃくせつ・にょり)も福州府の出身であった。

百拙は、その詳細は不明であるが、正保3年(1646)渡来、同年、崇福寺の2代住職に就任したが、慶安2年(1649)在職わずか3年にして示寂した。

そこで崇福寺では、その後任を選ぶなかで、当時、興福寺(寺町)に滞在していた無心性覚(むしん・しょうかく)に相談した。

無心は、福州府福清県(福清市とその一帯)の出身で、同郷の隠元とも親交があったのであろう、百拙の後任に隠元の法嗣(ほうし・弟子)也懶性圭(やらん・しょうけい)を推挙した。

也懶も福清県の出身で、密雲円悟(みつうん・えんご)、費隠通容(ひいん・つうよう)、さらには隠元について修行、正保3年隠元に嗣法(しほう・禅僧として認可されること) した。

慶安4年（1651)崇福寺から住職就任を依頼された也懶は、直ちに応諾、隠元の許可を得ると、勇躍、長崎に向けて厦門(アモイ)の波戸場輪渡を出帆した。

しかし、出帆して幾許もなく、乗船が座礁沈没、也懶は海中に示寂(じじゃく・亡くなること) した。

也懶が船出した輪渡跡（厦門市）

将来を嘱望された法嗣の不慮の死は、隠元にとって大きなショックであったろう、この後、無心は、隠元をその後任に推挙するが、隠元はもう他の法嗣は派遣できない、行くなら自分が行くしかないと覚悟を決めたのであった。

也懶が不慮の死を遂げた慶安4年、道者超元(どうじゃ・ちょうげん)が長崎に渡来、崇福寺の3代住職に就任した。

道者も福建省であるが、福建省の南、興化府莆田県(莆田市)の出身で、隠元の法弟亘信行弥(こうしん・ぎょうみ)について修行、後に嗣法した。

以後、道者は、精力的に活動、承応元年(1652)には平戸藩主松浦鎮信に招かれ、臨済宗普門寺(平戸市)で亘信南山禅を指導した。

そのようななか承応3年(1654)7月5日、隠元が渡来、同6日、興福寺に入り、4代住職(現在は開法開山)に就任した。

当初、道者は、隠元に協力、明暦元年(1655)隠元が崇福寺に移ると、道者は監寺(かんす・副住職)に退き、隠元が4代住職(本山万福寺開山)に就任した。

さらに明暦3年(1657)隠元の法嗣で、福清県出身の即非如一(そくひ・にょいつ)が渡来、崇福寺に入ると、道者は同寺内五帝室に隠居、即非が5代住職(現在は開法開山)に就任した。

このように道者が隠元、さらには即非に住職の座を譲ったのは、崇福寺の壇信徒が福州府出身の僧の住職就任を望んだからであった。

この明暦3年当時、亘信南山派は、道者1人であったが、隠元黄檗派は、隠元や木庵性瑫(もくあん・しょうとう)、即非など12人、しかも以後も続々と渡来するかのようで、道者にとってまさに多勢に無勢であった。

しかも道者も一抹の望みを託した加賀藩主前田家の菩提寺で曹洞宗天徳院(石川県金沢市)の招請の話もいつしか頓挫、さらには幕府が以後の唐僧の渡来を隠元黄檗派に限ったことで、完全にその後ろ盾を失うに至った。

万治元年(1658)は、隠元が4代将軍家綱に拝謁、万福寺の建立と隠元黄檗派の興隆が約束された年であるが、

道者が示寂した国欽寺（莆田市）

この年、道者は失意の内に帰国、4年後の寛文2年（1662)莆田県(莆田市)の国欽寺において示寂した(61歳)。まさに隠元とは明暗を分けた生涯であった。

＊参考文献：大槻幹郎他編『黄檗文化人名辞典』(株)思文閣出版　1988年